

イチゴのハダニ類の発生が増加しています！ 圃場の発生状況をよく観察し防除を徹底してください

[現在の発生状況]

1月下旬現在，県内9地点のイチゴ調査圃場におけるハダニ類の被害葉率は平年より高く，寄生葉率，被害発生地点率は平年よりやや高い(表1)。

11月以降，ハダニ類による被害葉率は増加し，平年値より高く推移している(図1)。また，被害葉の発生地点率も平年値より高く推移しており，12月から1月にかけて増加した(図2)。

表1 1月下旬のイチゴ圃場におけるハダニ類の発生状況

	本年値	平年値 ¹⁾	順位 ²⁾
被害葉率 ³⁾ (%)	34.6	9.7	1/11
寄生葉率 ⁴⁾ (%)	16.7	10.8	2/6
被害発生地点率(%)	67	49	3-4/11

- 1)平年値：平成16年～25年(10年間)分のデータの平均値。
ただし，ハダニ類寄生葉率については平成21～25年(5年間)分の平均値。
- 2)順位：過去の調査年数における本年の順位を示す。
- 3)被害葉率：ハダニ類の被害を認めた葉の発生率。
- 4)寄生葉率：生きているハダニ類の寄生を認めた葉の発生率。
調査は県内9地点で実施した。

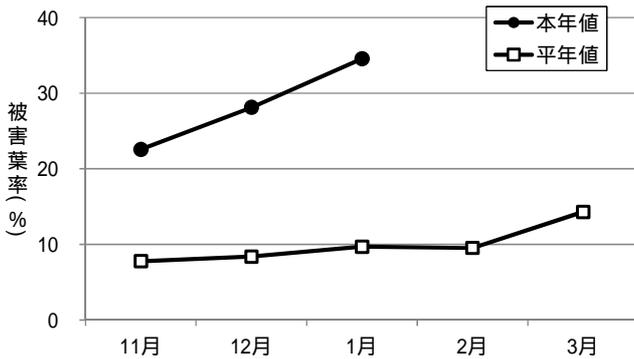


図1 ハダニ類による被害葉率の推移

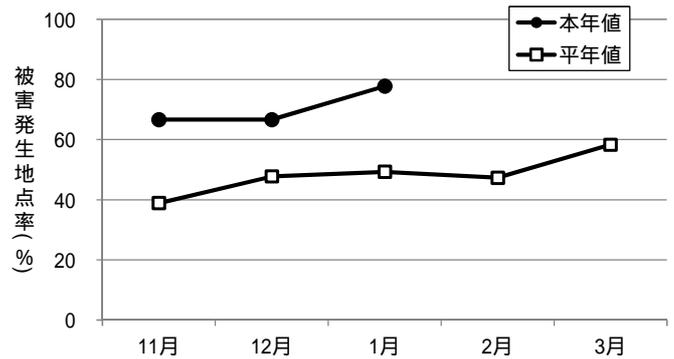


図2 ハダニ類による被害発生地点率の推移

図1，図2とも，平年値は過去10年間(ただし，3月のみ9年間)の平均値を示す。

[防除対策]

ハダニ類は増殖が速いので、表2を参考に、発生の少ないうちに防除を徹底する。防除所の巡回調査データでは、例年2月から3月にかけて発生が増加する傾向にある(図1, 2)ので、今後の発生に十分注意する。

薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう、十分な量で丁寧に散布する。なお、古い下葉を除去してから薬剤散布を行うと、薬液が葉裏にもかかりやすくなり効果的である。薬剤抵抗性の発達を抑えるため、気門封鎖剤を除き同一系統・同一薬剤の連用を避ける。ミツバチや天敵を使用している圃場では、薬剤の影響日数等に十分注意する(表2)。

表2 イチゴのハダニ類に登録のある主な薬剤(平成26年2月1日現在)

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数 - 本剤の 使用回数	有効成分	ミツバチに対する 影響日数の目安 ¹⁾	天敵への 影響日数 ²⁾	
					ミヤコ カブリダニ	チリ カブリダニ
アフーム乳剤	2,000倍	前日 - 2	エマメクチン 安息香酸塩	2日	- ³⁾	-
カネマイト フロアブル	1,000 ~ 1,500倍	前日 - 1	アセキノシル	翌日 ⁴⁾	0日	0日
コテツ フロアブル	2,000倍	前日 - 2	クロルフェナピル	10日	7日	-
コロマイト水和剤	2,000倍	前日 - 2	ミルベメクチン	1日	1日	-
スターマイト フロアブル	2,000倍	前日 - 2	シエノピラフェン	翌日 ⁴⁾	-	-
粘着くん液剤	100倍	前日 - -	ヒドロキシ プロピルデンブン	1日	* ⁵⁾	*
マイトコーネ フロアブル	1,000倍	前日 - 2	ピフェナゼート	1日	0日	0日

1) 農薬会社から得られた情報を取りまとめて記載した。あくまでも目安であり、日数が前後することがあるので注意する。

2) 日本バイオリジカルコントロール協議会作成の「天敵等への殺虫・殺ダニ剤の影響の目安」から抜粋して記載した。天敵の卵や成虫への影響も参照の上、薬剤を使用する。

3) - はデータなしを示す。

4) 影響がほとんどなく、翌日に導入可能。

5) *は薬液乾燥後に天敵を導入する場合は影響がないが、散布時に天敵が存在する場合には影響が出る恐れがあることを示す。アフーム乳剤とコロマイト水和剤はどちらもマクロライド系剤のため、連用を避ける。

アフーム乳剤は天敵の卵および成虫に影響が大きいので注意する。

注) 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載されている使用方法・注意事項等を必ず確認のうえ、周辺作物への飛散に留意する。